



大学 田中 貴宏
広島大学
大学院先進理工系科学研究科 教授



市担当課 ×
建設部
技術企画課



1 課題

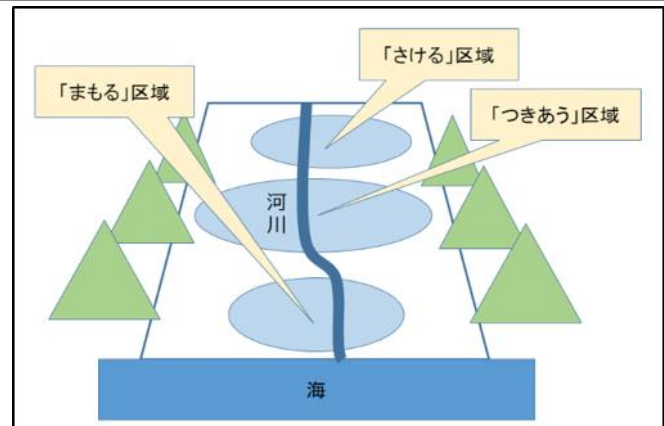
平成26年8月の広島豪雨、平成30年7月の西日本豪雨等に見られるように、線状降水帯を伴った豪雨が多く発生しており、流域における被災リスクが高まっている。一方、市街地では宅地化の進行により街の保水力が低下し、度重なる浸水被害が発生していることから、豪雨災害を想定した土地利用の再編が課題となっている。

2 概要

災害を想定した土地利用を

- ・「まもる」（土木的ハード整備により災害から守る区域）
- ・「さける」（居住を制限する区域）
- ・「つきあう」（建築物の建て方でリスクを軽減する区域）

の3点の視点から、学術的知見や化学的根拠に基づき検証する。



▲プロジェクト概要

実証実験概要

近年、気候変動等の影響により大雨の頻度が増加傾向にあり、今までの河川管理者主体の治水対策では能力的かつ経済的に限界を迎えつつあります。このような状況を受け、近年では、**流域全体のあらゆる関係者が協働して治水を行う「流域治水」**の必要性が指摘されています。この流域治水の取り組みの一つに「**田んぼダム**」があり、全国で田んぼダムの実装が進んでいます。瀬潮川流域においても田んぼダムの実装を進めるため、今回、田んぼダムの実証実験を行います。

田んぼダムとは

田んぼの排水口に流出調整板を取り付け、河川への流出量を減らすことで洪水抑制を図るもの

通常の水田 田んぼダム

目的

「どのくらい効果があるのか?」「水田の大きさによって、どのくらい効果が違うのか?」などの、田んぼダムに関する様々な知見を得ること

▲「つきあう」方策のひとつ田んぼダムの水害抑制効果検証

3 研究成果 手法等の構築

- (1)田んぼダム実証実験
- (2)流域土地利用計画シナリオの作成のための東広島市各担当課へのヒアリングの実施

4 今後の展望・現状 次の研究段階へ前進

- (1)流域土地利用計画シナリオによる水害軽減効果の評価
- (2)田んぼダムの効果を考慮した流域土地利用計画の作成・提案

→ 令和7年度 共同事業型